

岸幸一さんの急逝を悼んで

わたくしたちの畏友岸幸一さんは、インドネシアでの経済協力調査に従事中病いを得て11月12日夜帰国、同14日朝急逝された。まったく晴天の霹靂であった。わたくしたちはいま、日本におけるアジア関係の資料事情に関するエキスパートとして、また東南アジアとくにインドネシアの政治社会に関するすぐれた研究者として誇りとした岸さんを失い、深い哀惜に包まれている。

岸さんとアジアとの出会いは、昭和13年の東亜研究所入所によってであった。以来30年間、資料・調査研究活動をつうじて終始アジアへの接近に精力を傾けられた。とくにインドネシアとの関係は、昭和17年から5年間海軍民政府の一員として現地で生活して以来抜き難いものになった。最近10年間は、数回の現地調査を含めて激動下のインドネシア研究に邁進し、ついにはこれに生命を捧げられたのである。

アジアを中心とする低開発地域の資料事情について、岸さんは当研究所の初代の図書資料部長として、基本文献や資料の収集整理の体系をつくり、「資料センター」の基礎づくりをしたほか、困難な図書目録の編纂事業を企画・組織して、「現代中国」、「東南アジア」、「中東」などの総合目録の編纂の軌道を敷かれた。岸さんのすぐれた企画力と組織力はここで遺憾なく発揮され、資料活動

をつうじて調査研究活動に推進的役割を果たされた。また調査研究の領域では、当時日本では未開拓であった組織的な地域研究の推進につとめられ

たが、とりわけインドネシアの政治学的研究においてユニークな多くの業績を残されている。岸さんのインドネシア研究は、研究者としてのすぐれた資質はもちろんであるが、とくに長い現地生活とたびたびの現地調査の体験にもとづいた実証的研究と、研究情況、資料事情についての該博かつ豊富な知識の蓄積に裏打ちされて精彩を放っているように思う。もう一つ最近の岸さんのインドネシア研究の

特徴は、科学者の眼で鋭い現状分析を行なっていることである。日本・インドネシア関係に新しい時代が訪れようとしている現在、これまでの研究業績に加えて、こうした現状分析への期待が高まっているとき、研究半ばにしてたおられたことは痛恨に堪えない。

だが岸さんが残された資料・調査研究活動の業績は、多くの後継者によって継承され展開されるであろう。これは研究者冥利である。生涯をかけた研究に生命を捧げることは、古風ないいかたをすれば男子の本懐かもしれない。わたくしたちは後継者に期待し、ひたすらご冥福を祈るのみである。

(調査研究部長 笹本武治)



略 歴

昭和13年3月 早稲田大学文学部史学科卒業
昭和13年9月 早稲田大学大学院商業部退学
昭和13年9月 東亜研究所入所
昭和17年6月 南西方面海軍民政府嘱託
昭和18年4月 東亜研究所副調査員
昭和21年3月 東亜研究所解散により退職
昭和21年7月 復員
昭和23年4月 国立国会図書館調査員
昭和29年6月 国立国会図書館一般考査部社会科学資料課長
昭和34年6月 アジア経済研究所へ図書資料部長として入所
昭和34年12月 アジア、中近東諸国へ出張（資料事情調査および現地派遣折衝）
昭和35年11月 中近東諸国へ出張（資料事情調査および資料収集）
昭和36年8月 アジア経済研究所調査研究第2部長
昭和38年5月 アジア経済研究所調査研究部専門調査員
昭和39年3月 アメリカ合衆国へ出張（エール大学、コーネル大学のインドネシア問題の共同研究のため、昭和39年10月まで）
昭和40年6月 インドネシアへ出張（「インドネシアの総合研究および農業開発研究」に関する現地調査）
昭和42年8月 アジア経済研究所調査研究部主任調査研究員
昭和42年11月 タイ、インドネシアへ出張（「インドネシアの工業化」に関する現地調査）
昭和43年4月 インドネシアへ出張（「インドネシアの工業化」に関する現地調査）
昭和44年2月 インドネシアへ出張（インドネシア経済協力調査団）
昭和44年7月 インドネシアへ出張（対インドネシア経済協力関係調査）

主要著作・論文

〔著書〕

岸幸一、西島重忠『インドネシアにおける日本軍政の研究』（紀伊国屋書店、1959年）。
岸幸一編『アジア諸国資料調査』（アジア経済研究所、1960年）。

K. Kishi ed., *Documentary Materials in Asian Countries* (Tokyo: The Institute of Asian Economic Affairs, 1963).

サウル・ローズ著、岸幸一監訳『東南アジアの政治』（紀伊国屋書店、1965年）。

久米孝彦著、岸幸一監修『インドネシア——複合経済の背景』（アジア経済研究所、1966年）。

岸幸一『スカルノ体制の基本構造』（アジア経済研究所、1967年）。

岸幸一、馬淵東一編著『インドネシアの社会構造』（アジア経済研究所、1969年）。

〔論文〕

「指導される民主主義」（板垣与一編『インドネシアの政治社会構造』、アジア経済研究所、1961年）。

「インドネシアの農地改革と土地改革の本質」（『エコフェ通信』、306号、1962年）。

「ジャワ人社会におけるイスラームとアダットの交錯——クリフォード・ゲールツの見解を中心として」（『アジア研究』、9巻1号、1962年）。

「戦後日本における東南アジア研究——近代政治学分野の業績について」（『アジア研究』、11巻1号、1964年）。

「インドネシアにおける近代化と地域主義——南スラヴェシのケース・スタディ（I）（II）」（『アジア経済』、6巻8、10号、1965年）。

「スカルノ体制の基本構造と9・30運動以後の変容」（『アジア研究』、13巻1号、1966年）。

Y. Itagaki and K. Kishi, "Japanese Islamic Policy in Sumatra and Malaya," *INTISARI*, Vol. II, No. 3 (1966).

「ジャワの村落組織についての覚書——デッサとカルラハンについて」（『東洋文化』、43号、1967年）。

「インドネシアの国民国家の形成における慣習首長の地位と役割」（『アジア経済』、8巻6号、1967年）。

「インドネシア地域経済構造に関する基礎資料」（『アジア経済』、8巻6号、1967年）。

「新体制インドネシアの経済政策と経済事情」（『アジア経済』、8巻6号、1967年）。

「インドネシア現政権の経済政策の基調と展開」（日本エコフェ協会『調査資料月報』、1巻8号、1968年）。

「日本におけるインドネシア研究」（『アジア経済』、10巻6・7号、1969年）。